

今を 読み解く

国際基督教大学教授

森本 あんり

トランプ氏当選のニュースは、開票日にニューヨークへ向かう飛行機の中で聞いた。機長の臨時アナウンスがあったからである。機内からはいくつもの唸り声が上がったが、それが嬉しかったのか悲しかったのかはわからない。

おそらく、今も多くの人がわからないままだろう。立て続けに何冊かの「トランプ本」が出版されたが、「今を読み解く」には、他人のニュース記事を集めた解説ものより、自前で綿密な調査と分析を行ったものを読む方がよい。

●「負けない」信念

マイケル・ダントニオ『熱狂の王 ドナルド・トランプ』（高取芳彦・吉川南訳、クロスメディア・パブリッシング・2016年）は、ピュリツァー賞ジャーナリストが家族や側近との面談を繰り返して、本人からは提訴の脅しを受けつつ書き上げたもので、トランプ氏の誇大なナルシズムを現代人に共通の姿と捉えている。『トランプ』（野中香方子ほか訳、文芸春秋・16年）は、ワシントン・ポストが辣腕記者20人を動員して3カ月で書き上げた総力特集だが、それをひと月余りで日本語にした翻訳チームの手腕も見事である。

こうした取材から浮かび上がるのは、なぜ彼は米大統領を目指したのか、という問いである。1987年のテレビ番組で、選挙戦なしで大統領になれたらなるか、と尋ねられた彼は、いや、大統領になること自体よりも「選挙に勝つ満足感」を得るこの方が大きい、

トランプ氏就任と民主主義

内なる脅威と向き合う

を世界に示すことだった、と解釈できるかもしれない。さて、その目的を達成してしまった今、次のゲームは実際に大統領として機能することである。世界は固唾を呑んでその勝敗を見守っている。

●暴走と機能不全

トランプ後の世界を読み解くには、もう少し引いて現代社会における民主主義や投票の機能という大枠について考える必要もある。それは、民主的な常識の通じない世界からやってきた論者たちによく見えるようである。ブルガ



リア出身のツヴェタン・トドロフによる『民主主義の内なる敵』（大谷尚文訳、みずす書房・16年）は、民主主義の本来的な構成要素が分解して暴走したことに機能不全の原因を見る。著者はこれを人間のヒュブリス（傲慢）と捉え、古代のアウグスティヌスとペラギウスの間に交わされた神学論争にその範型を求めている。

はたして人間は、みずからの意志によって、つまり神の恩寵の助けなしに、善なる世界を作り出すことができるのか。民主国家は、人権擁護と自由市場という高邁な

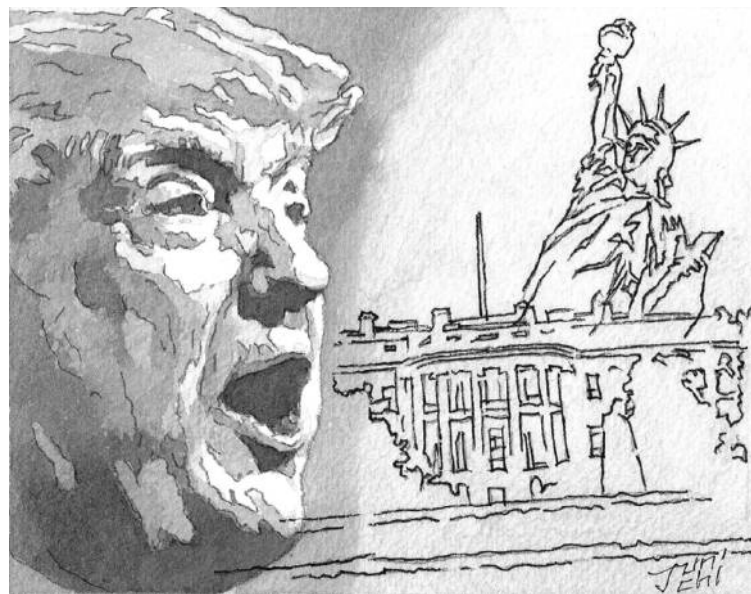
目的のために、戦争を含むあらゆる手段を正当化してきた。それは、人間が自力でユートピアを建設できると信ずる政治的メシアニズムに他ならない。革命的な千年王国思想の後継者は全体主義や共産主義だが、これらの醜悪な外敵に勝利した民主主義は、今やその同じ脅威を自己の内に抱えこんでしまった。その結果、人民はポピュリズムに乗っ取られ、自由は過剰に擁護されて他者を傷つけ、進歩は強制となった。近代啓蒙の自律的な人間は、原罪などという古めかしい教義を信じない。だがそれは、人間の限界を知る本来的な保守思想の一部なのである。

●権威失墜の現代

ベネズエラ出身のモイセス・ナウムによる『権力の終焉』（加藤万里子訳、日経BP社・15年）は、今次の選挙戦を解説する「期待感の革命」と「参入障壁の低下」という2つの鍵を提供してくれる。前者は、情報アクセスの進化により生じた「どこか他にもっとよい社会があるはずだ」という漠とした改革への期待感のことであり、後者は、巨大な組織背景をもたない素人でも大統領選挙にエントリー可能となったことを指す。ナウムは、これらが現代社会のあらゆる局面で不可逆的に「権威」の失墜を招いていることを懸念する。

ひとくちに「民主主義」といっても、その内容には多数決選挙や統治の正統性や法の支配など、いろいろな要素が含まれる。民主主義に優る体制が他にないとすれば、あとは各要素の行き過ぎを防ぎつつ、それらをどのように上手く機能させるか、という調整の問題である。

さて、金曜日に就任式を迎えるかの国の大統領は、どこまでヒュブリスを捨てて中庸や調整という徳を示してくれるだろうか。



20日に米大統領に就任した後、中庸や調整という徳は示されるだろうか
イラスト・よしおか じゅんいち

と答えている。2011年のホワイトハウス晩餐会では、列席していた彼をオバマ大統領が冗談のネタにして手ひどくからかった。幼時からひたすら「負けないこと」を信念としてきた彼のことである。もしこの時立候補を決意したとすれば、その目的は大統領として何かをすることよりも、選挙に勝って自分が最強の男であること